産経新聞　朝刊　和歌山版　2021年8月1日

くじら日記

太地町立博物館から

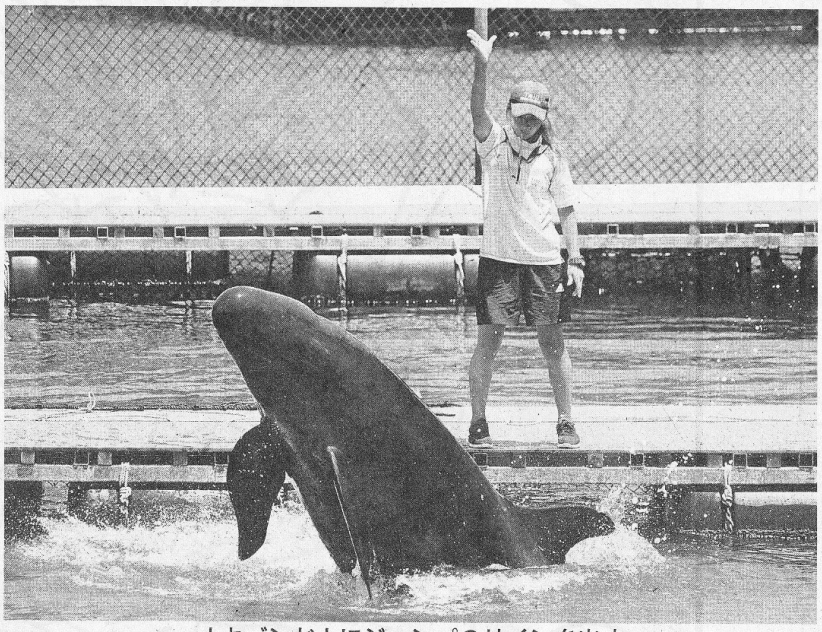
人を「視（み）る」オキゴンドウ

トレーニングは真剣勝負

オキゴンドウがショーエリアを囲う網のわずかな隙間をくぐり抜け、別のプールに行ってしまったため、クジラショーへの欠場を余儀なくされました。トレーナーは日頃の観察や経験を頼りに対策を講じていましたが、オキゴンドウは新たな脱出ルートを見つけたようです。知恵比べはオキゴンドウに軍配が上がりました。してやったりのオキゴンドウは、飼育15年目、体長4・8メートル、体重750キロ。くじらの博物館最大の雄のクジラです。

オキゴンドウは、長くほっそりとした体形から「キュウリゴンドウ」というかわいい呼び名がある一方で、大きく円錐（えんすい）形の歯を持ち、大型の魚やイルカまで襲って食べます。英名を「false killer whale（偽物のシャチ）」といい、海の食物連鎖の頂点「シャチ」の名を冠したクジラでもあります。

野生では、はえ縄漁業で釣れたマグロを、オキゴンドウが盗み食いをする「シャチ食い」という漁業被害が問題になりました。それも、釣り針にかかったマグロの頭は器用に残していくそうです。普通、イルカの歯は獲物を捕らえるだけの役割を持つのですが、シャチやオキゴンドウなど一部のクジラは、丸飲みできないような大きな獲物でも、肉や内臓だけをえぐり取って食べることができます。長崎県壱岐では、オキゴンドウを「シャチもどき」と呼び、駆除の対象になったこともあるなど、厄介者にされました。



オキゴンドウにジャンプのサインを出すトレーナー＝太地町立くじらの博物館

人とオキゴンドウの奮闘はくじらの博物館でも同じ。トレーナーのミスや、思い違いがあれば、それを敏感に感じ取り、離れていったり、時には攻撃的になったりすることもあります。また、担当者以外から与えられた餌を、何が気に食わないのか、空腹にも関わらず吐き出して食べなかったこともあります。オキゴンドウが人を〝視（み）て〟行動するからです。

知的で戦略的、強情で大胆不敵、時に偏屈な（？）オキゴンドウですが、実は、意思の疎通ができれば、これほど頼りになるクジラはいません。指示に忠実で正確、巨体ならではのダイナミックさとイルカにも劣らないアクロバティックさを兼ね備えたパフォーマンスは随一です。

ごまかしが効かず、逆にトレーナーが試されているかのようなオキゴンドウのトレーニングは、真剣勝負そのもの。トレーナーの一番の先生は「動物」だと言いますが、人を〝視る〟オキゴンドウに認められてこそ、一人前のトレーナーになるのだと、若きトレーナーを荒野に送り出す気持ちで見守っています。

（太地町立くじらの博物館副館長　稲森大樹）

◇

原則第1日曜日に掲載します。